評者がつらつら考えるのに，日本文化が外来の文化と接触して起ったさまざまないわゆる文化ショックのうち，最初で最大のものは漢字の導入による日本語の標記が確立されるプロセスである。第2期（豊織時代以後），第3期（江戸末期以後）は西欧文化に触れた時代のそれ，第4期は敗戦による，特にアメリカ文化のそれであろう。第一期がわれわれの祖先が経験した苦渋に満ちた時代で，第二期のそれとともにその後遺症は今日にまで及んでいる。第二，第三期は既に日本語の体系を文字化する術を会得していたから，大したものではなかった。本書は日本の植物名の第一～第三期のショックをカバーしているといえる。第四期はむしろ世界的の現象が日本では特に強く現われたと見るべきもので，ペルリ来航以来昭和初期までに少しづつ経験済みのものであった。本書は全般的に懐古的な情報を与えるものであるが，衣食の足りた今日，自身の歴史的なstatusを考え，将来を見通す時が来たことを悟らされる。こういう反省を与えるこの書が木村博士によって大きくまとめられたことは大変にうれしい。　（津山　尚）

□白籏史朗：**カラー 高山植物** 349 pp. 1982. 東京新聞出版局. ¥5,000. 収録した植物は283属675種。白籏氏は登山家，写真家として高名の人。海外登山ではヒマラヤ，アンデスの諸峯を訪れている。紀行文も多い。写真は左ページに，植物の説明は右頁にする配慮があり，文に正硬さがなく流れる如きものがある。「岳人」に1979年から満3年間連載したものをもとにした由。p. 3～5 の“はじめに”は高山植物の成因論，分布の様相が素人わかりのするように述べられ，さらに従来の図鑑と一味ちがう所は分類学の順にまとめず，花色で検出できるようにし，同属の似たものはまとめて説明してある。シダ類，地衣類もわずかに取り入れてある。植物の各部分の名称，葉型や花序の模式図もある。ただし，この図の一部は他書をそのまま写したもので，白籏氏らしからぬでき事と思う。高山植物の厳密な定義には諸説があるが，本書には平地の森林生のものまで収録されている。高山植物と称する書名からは著しく逸脱している感がある。しかし科または属を同じくするものを同一頁で説明して記述の重複を避けた著者の方法論から言えば，許されるものかも知れない。下手に学問づかない所がジャーナリストとしての著者の最大のメリットと思われる pp. (1)～(23)（後尾からの頁数（　）つき）の50音順，科属別および花色による索引は本書の必須の部分である。　（津山　尚）

□杉本正流：**鹿児島県の植物図鑑** 393 pp. 1989. 朝日印刷書籍出版（〒800 鹿児島市上荒田町 854-1). ¥6,500（送料¥350). 営林署勤務の著者が永年にわたって記録したもので，立派なカラー写真667点と簡単な記述，産地，用途が記されている。付録として北薩地方の植物方言，大口地方の植物目録，薬用植物のリストがある。最近カラー写真図鑑の刊行が多いのであえて注文をつければ，記述の中にご自身独自の観察結果をもっと盛り込んでほしいこと，リストとくに方言では，自身の採録したものと文献からの引用の区別をしてほしいことである。　（金井弘夫）